
うみにおちる

採火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うみにおちる

【Nコード】

N0323J

【作者名】

採火

【あらすじ】

人魚姫をモチーフに童話として描いた作品です。

流れるような文体を意識して描いたものなので、詩を読むような感覚で読んでもらえると嬉しいですよ。

人はなぜ、涙など流すのでしょうか。
海の水を、後ほんの少しだけ、しょっぱくすることすらできないの
に。

海辺の村に生まれたその娘は、生まれてから一度も泣いたことがあ
りませんでした。

どうして涙を流さないのか、尋ねる人に娘は言います。

「涙など流して何になるでしょう。涙を流すくらいなら、私は歌を
歌います」

娘の歌は、それは美しいものでした。

ひとたび娘が歌いだせば、どんなに猛った風も止み、波は穏やかに
凪いで、人も動物もみな、うっとり娘の声に聞き入ります。

ある日、娘の年老いた両親が亡くなりました。

娘は歌を歌います。

その歌声はあまりに悲しく、人々はみな、ぼろぼろと大粒の涙を海
に落としました。

けれど、どれだけ多くの人が涙をこぼそうと、決して娘は泣きませ
ん。

涙の溶けた海水を、そっと両手で飲み干して、娘は小さくつぶやき
ました。

「人はなぜ涙など流すのでしょうか。」

どんなに涙を流しても、海の水を、後ほんの少しだけ、しょっぱく
する事すらできないというのに「

娘があまりに美しい歌を歌うので、やがて村の人々は、娘を人魚と
噂しました。

娘が決して泣かぬのは、涙を持たない「人魚」だからと。

娘はとても傷ついて、深く深く悲しみました。

けれど、涙は落ちません。

泣いて何になるでしょう？

何一つ、かわることなく。

やがては海へ帰るだけ。

ほんの些細なことですら、なにも変わりはないでしょう。

やがて娘は漁師の妻になりました。

漁師は娘と、娘の歌をなによりも愛していましたので、娘が涙を流さないことなど、ちつとも気にはしませんでした。

むしろ泣けない娘のことを、誰より哀れに思っていたのです。

妻となつた娘は言います。

「もしもあなたが先に死んでも、私はきつと、涙を流しはしないでしよう。けれど、こぼれぬ涙の代わり、私は歌を歌いましょう。

あなたを送るためだけに、幾代も歌を歌いましょう」

夫もまた、妻に言います。

「もしもお前が先に死んだら、私はきつと泣くだろう。私は歌を持つためから、涙でお前を送るだろう。お前残した亡骸が、いつか小さな貝になるまで、お前を抱いて涙で送ろう」

娘は、夫との間に二人の子供を設けました。

一人目の子は、生まれて間もなく病を得、あつというまに海へと還つて行きました。

妻は子の死を悲しんで、幾夜も幾夜も歌います。涙であれば、とうの昔に枯れ果てて、一粒たりともこぼれぬほどに、娘は歌い続けました。

けれどどんなに嘆こうと、泣かない娘の悲しみを、人々は信じられません。

我が子が死んでも泣かないと、みなは娘を責めました。

それでも夫はただ一人、決して妻を責めません。

泣けない妻が誰よりも、哀れと知って責めません。

「泣いて何になるでしょう。泣いてもあの子は帰らない。何が変わ

るというのでしょう」

娘の産んだ二人目の子は、体も強く、すくすく大きく育ちました。海へと消えた子の悲しみは、未だに残っていました。二人はとも幸せでした。

けれどもそれも長くは続かず。

娘は病を患って、あつという間に命を落としてしまったのです。

夫と子供は、ひどく嘆き悲しんで、娘を抱いて泣きました。

幾日も幾日も、涙は決して枯れません。

泣かない娘の両の脛に、涙は幾度も流れます。もう開くことのないその唇を、涙は何度も濡らしました。

それからどれほどの月日が経ったことでしょう。

泣かない娘が目覚めると、彼女の姿は海に棲む、一匹の人魚へと変わっていました。

人として生きた時に一度も涙を流さなかった為か、娘は今度こそ本当に、涙をもたない人魚へと生まれ変わっていたのです。

娘は人として生きていた頃の記憶を覚えていましたが、自分が人魚へと生まれ変わったことを、少しも不幸には思っていないませんでした。むしろ、ホツとしていたのかもしれない。

海には、彼女が涙を持たないことを責めるものはいませんでした。

ある日、海が大きく荒れました。

風にあおられ、大きな船が一艘、海に沈んだのです。

船では、若い漁師が村の娘と祝言を挙げていたらしく、たくさんの人が一斉に海へと放り出されてしまいました。

白い内掛けをまとった娘が、夫であったろう、若者にじっと抱きしめられながら、やがて波に飲み込まれてゆきます。

娘はそれを哀れに思い、静かに歌を歌いました。

娘の唄に、海は段々と静まって、やがては風も凪いでゆきます。

それは、凪いだ海の上に、美しい人魚の歌声以外、誰の声も聞こえなくなつた頃。

皺だらけの老人が一人、壊れた船のかけらにつかまり、人魚のすぐ近くへと流れ着きました。

人魚は歌をやめ、そっと老人に手を差し伸べます。老人の体は冷たく、息があるのかも、もうわかりません。

きつと、祝言を挙げた若者の父親だったのでしよう。他の村人よりも、ずいぶんと立派な晴れ着をきています。

片手は固く握りしめられたまま、指の間からはだらりとひものようなものが垂れ下がっていました。

既に死んでいるのなら、せめて亡骸を陸へと送ってやろう。

そう思つて、老人のだらりとした腕に、人魚がそつと手を掛けたその時。

何かを握りしめていたはずの手が、まるでその時を待っていたかのようにゆっくりと開かれていたことに、人魚は気付きました。

次の瞬間、老人の手の中から零れ落ちようとする何かを、人魚は咄嗟に、己の掌で受け取っていました。

それは、古びた紐のようなものがついた、丸く小さな、石のようなもの。

いいえ、それは石ではありません。

人魚には、それがなんであるのかが、不思議なことに、はつきりとわかつていました。

人魚はハツと、老人の顔を覗き込みます。

それは、まさしく人であった頃の、人魚の夫の顔でした。

海に沈んでいったあの若者は、幼い頃に別れたきりの、人魚の息子だったのです。

人魚は、かつて夫が口にした約束を覚えていました。

夫はかつての約束通り、彼女の亡骸が、小さな骨になり、やがて波で削られた貝のように、白く丸くなるまで、ずっとその胸に抱いて、涙を流してくれたのでしよう。

「ああ、なんていうことでしょう」

夫の育てた息子の顔すらも、人魚は見る事ができませんでした。人魚が思い出せるのは、花嫁と共に、海へ沈んでいった、悲しげなその背中だけなのです。

人魚は、まるで消えてなくなることを恐れるように、己の掌で、ぎゅつとそれを握りこんだまま、冷たくなった夫の体を、しっかりと両腕で抱きしめました。

「ああ、なんとということ」

「なんてひどいことでしょう！」

人魚は声を震わせて、それでも歌を歌いました。

かつての夫との約束を守る為に。

知らず見殺しにしてしまった、我が子の為に。

けれど、どんなに歌おうとも、悲しみは癒えません。

歌っても歌っても、どこからかどこからか、悲しみが湧いてくるのです。

それは今にも喉が張り裂けて、身体中から溢れ出ん程に。

人魚は、人であった頃には一度も泣いたことがありませんでした。

けれど今、自分にはもう涙が流せないことが、悲しくて仕方ありません。

人はなぜ、涙など流すのでしょうか？

海の水を、後少しだけ、しょっぱくすることもできないというのに、なぜ、泣きたいと願うのでしょうか。

どうしようもなく、泣きたいと願うのでしょうか。

人魚となった娘は、泣くことができせん。

例えばどんなに泣きたくなっても、もう涙を流すことはできません。

人魚の歌に、海の魚や、空を飛ぶ鳥までもが、ぼろぼろと涙を流しました。

不思議なことに、涙はこぼれる落ちる度、小さな真珠となり、海へと沈んでゆきます。

まるでもう泣く事の出来ない人魚の涙のように、海へ消えてゆきました。

やがて、すべての涙が海へ溶けていった時。
海にはもう、誰一人として浮かんではいませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0323j/>

うみにおちる

2011年11月12日15時16分発行